

八重山の庁舎があったところ

蔵元跡は、一六世紀に琉球王国が八重山諸島を版図に加えた際、最初に行政府を置いた場所で、現在は沖縄県の史跡に指定されています。

蔵元を置いたのは、竹富島では今もなお敬愛され神として崇められている西塘（生没年不明）です。

竹富島出身である西塘は、琉球王に請われて沖縄本島へ行き、石匠として大成します。現在では世界遺産に登録されている園比屋武御嶽石門の建立（一五一九）をはじめ、数々の城壁や石門の築造に関わり、一五二四年に八重山の統治者の官位にあたる武富大首里大屋子を首里王から授かって、竹富島に帰郷します。

西塘は農業の振興をはじめ、八重山に首里の最先端の技術をもたらしました。その名残りは、蔵元跡の近くには鍛冶を鍛錬した跡などが残っています。

その後、西塘は石垣島へ蔵元を移してその役割を終えますが、竹富島の人々は、八重山を最初に統治した人物、八重山を最初に統治した場所は竹富島であることに誇りをもっています。

この跡地は、竹富島が八重山諸島における琉球王国の政治的中心から、一六〇九年に薩摩藩（鹿児島）の侵略によって属領となり、一八七九年に沖縄が日本に併合されるまで、竹富島が長年にわたってどのように変化したのかを示唆しています。